

# 北海道の元気! NPO訪問

21 NPO法人 楽しいモグラクラブ

文・加藤知美

## 生きづらさを抱える人たちに居場所を 中間労働の実践で、生き方探しのお手伝い

◇ みんなで楽しく引きこもる喫茶店

札幌市北区の住宅街にある喫茶店には、引きこもりの人たちが集まっている。店の名前の「楽しいモグラクラブ」は、土の中で生活するモグラが不登校や引きこもりを表し、自分の生き方を見つけるために楽しく引きこもう、という意味をこめてつけられた。不登校、引きこもり、障がいを持つ人の居場所として開店し、生き方を模索するさまざまな世代の人たちが時間を過ごしてきた。と同時に「中間

労働」の概念をとりいれて、そうした引きこもりの人たちの起業活動を支援している。二〇〇九年に経済産業省がソーシャルビジネスの先進事例として選定した「ソーシャルビジネス55選」に、北海道内四事業者のうちの一つとして選ばれた。

喫茶店を経営する「NPO法人楽しいモグラクラブ」理事長の平田真弓さんは、いつも元気なエネルギーを発信して、喫茶店に来るさまざまな人たちの話を傾けている。平田さんが喫茶店を開業したいと考える中で、不登校や引きこもりの人の居場所を作りたいという思いをこめて、この地に二〇〇一年に店を構えた。

平田さん自身、ローマ字を文字と認識できないなどの発達障がいや子どもの頃から持っていた。どうしてほかの人と同じことができないのだろうと悩み続けたが、のちに発達障がいの専門家に出会い、初めて自分の障がいを知った。以来、生きるうえで困難も様々な工夫でのりこえ、自分と同じように生きづらさを抱える多くの人たちを支援したいと思うようになった。

◇ 日々の活動から独自の「中間労働」を具体化

店内には書棚が並び、経営哲学や心理学の本が

大量にある。平田さんが引きこもりや不登校を理解し組織を運営するために読んだ本だ。補助金などに頼らない自立した経営を心に決めて必死に勉強した。フォーラムなどにも

参加し、積極的に人との出会いを重ねて人脈作りもした。そうしたときに知ったのが、「中間労働」の概念だった。中間労働とは競争労働と福祉の間の概念であり、仲間同士のゆるやかなつながりにより支えあいながら、自分たちのペースで仕事をするという働き方である。

楽しいモグラクラブには itkai (アイティカイ) というグループがあり、ホームページの作成やパソコン教室などの仕事をしている。喫茶店に集まる不登校や引きこもりの人にはITが得意な人が多く、まずサークル活動が始まった。スキルがあつて仲間がいても競争の激しい労働環境での就労は難しく、働き方を工夫して、スキルを生かした起業モデルをつくらうと平田さんは考えた。そうした折、ホームページの地図上に安否情報や道路の損壊などをユーザーが書き込んだり、土砂災害の危険性を表示できる防災ソフトの作成を九



楽しいモグラクラブのお店の前で  
理事長の平田真弓さん



カルチャーナイトの日の店内の様子  
通常は月～土の午後1時から7時（冬季6時半）の営業

たスローライフのような生活スタイルが持続可能な社会を考へる上で注目されている中で、競争労働への復帰のためのステップにとどまらず、言わばスローワークとして、新しい働き方のひとつ

現在お店は、引きこもりや不登校の人たちのかけがえのない居場所であるとともに、近所の人や学生やボランティアの人たちが出入りする長屋のようなコミュニティカフェになり、あるときは会員の仕事の間ともなっている。社会人の来店者も多く、職場での人間関係からうつ病になったという中高年が悩みをうちあけたりする。しかし、引きこもり、不登校、うつなど様々な困難を抱える人たちの中には自殺願望の強い人も多く、「長屋」と言えども支えきれないこともある。「捨てたらあ缶」とジョークの書かれた木製のプレートに「いのち(を)」を書き添えられて吊るされていることからもうかがえる。だからこそ居場所づくりに加えて仕事づくりが必要だと考える平田さんの思いは切実なのだろう。

平田さんは、引きこもりなどに対応する既存の行政の支援制度や補助金に依存しないで自立した経営を目指す考へた。当初は国の補助金の獲得なども試みたが、福祉の枠からはみ出し画期的すぎると平田さんの考へ方は評価されず、自ら事業をおこし、寄付を集めることを決意した。また、平田さんは会員たちにも自立し合いながら仕事や生き

州の大学から依頼された。平田さんは、納期遅れや品質への妥協を許さずプロとしての品質を要求しつつ、メンバーを励ましながら仕事を見守った。中間労働だからといっていい加減な仕事をすれば、そうした評判が定着してしまう。メンバー同士のためすけあいを奨励したが、普段は各自の自宅で作業してもらった。自宅で働きモグラクラブに来て息抜きをするという通常の会社勤めとは逆の独自の就労パターンを生み出した。週に一回は「出社」して対人関係にも慣れてもらった。

こうした中間労働の概念は、単に一般的な競争的労働環境へのつなぎとしてだけではなく、多様な働き方の選択肢の一つとして大きな可能性を持っている。効率至上主義によらない価値観に基づいたスロー

に位置づけられる可能性がある。実際、防災ソフト作成の際に中心的役割を担った三〇代のメンバーは、母親の看病のために会社を辞めていた中で、仕事と介護のバランスを保ちながら完成にこぎつけた。

### ◆ 自立経営とさらなる仕事づくりを模索

方を学んではいいと思っっている。いろいろな出会いの中で成長し合っている。プロとしての仕事のスキルを身につけ、いろいろな問題を抱えながらも少しずつ安定した生活基盤を築いていけるよう応援している。

ITのスキル以外にも仕事づくりに知恵を絞っている。一つは、飛行機や人間の足など複雑な形や微妙な立体曲面を加工できる木工クラブ製作用ソフトを使った三次元加工で、そうした木製品や木のおもちゃを商品として販売すれば、やすりがけや発送作業は仕事になる。

また、癒しの観光の構想をあたためている。子育てで疲れているお母さんたちを見て保養所をつくりたいと思ったのがきっかけだ。楽しいモグラクラブの「親の会」のメンバーが接遇などのスキルを身につけ、さまざまな問題の現場での経験を生かして自ら動くことで自己肯定も生まれる。癒しの観光のビジネスにより、社会的弱者や若者の雇用も生み出し、社会保障の役目が果たせ、北海道の経済を元気にしていくことを願っている。



補助金に頼らない経営を模索して、ソーシャルビジネス選考事例として選ばれた

### ◆ NPO法人 楽しいモグラクラブ

所在地 札幌市北区北19条西3丁目2番33-100号  
TEL 011-7581-3232  
WEB <http://mog.tla/>